

持続可能な社会を作りたい 目線を変えて、価値を作る



横手市十文字に本社を構えるPilz株式会社。代表取締役の畠山琢磨さんは、菌床しいたけ農家だった父の影響を受け、東北大学大学院農学研究科に進学。進学と同時に農事組合法人アグリピースに就農した。現在、畠山さんは菌床しいたけの栽培のほか、廃菌床を活用した昆虫の事業、昆虫の糞を使った堆肥事業などを行っている。この夏新たに就労支援B型を開設。畠山さんが目指すものについて、お話を伺った。



ピルツ
Pilz 株式会社
代表取締役 畠山 琢磨

〒019-0508
横手市十文字町
十五野新田明神東58-2
TEL: 0182-24-1622
<https://pilz-corp.com/>



HP

就農のために大学院へ進学 目線を変える重要性を知る

横手市で菌床しいたけ栽培を行うPilz株式会社。令和元年に創業した若い会社だ。代表取締役の畠山琢磨さんは、子どものころから父の仕事を引き継ぎ、就農するつもりだった。仙台の大学院に進学が決まったとき、父が脾臓がんであることが発覚した。大学院卒業を待たずに父が代表理事を務めていた農事組合法人アグリピースに就農し、2年間は学業のために週に1度仙台に通い、しいたけ栽培のノウハウを学びながら、従業員のマネジメントも行う。父との時間も大切にするという多忙な日々を送った。

「大学院での研究テーマは『事業体における持続発展的な可能性』でした。企業がどうすれば持続的に発展していくか



のかを研究したかった。その当時からSDGs的な考え方方が根本にありました。今となっては、自分がずっと考えていたことが世の中のトレンドになったと思います。イノベーションをするためには、目線を変えることが必要です。これまで不要だと判断されていたものが、目線を変えることで活用できる資源になる」。

子ども時代の記憶から 廃菌床の活用法を見出す

それを具現化したものが、廃菌床を使った昆虫飼育事業だ。使い終わった菌床は廃棄するために費用がかかる。「秋田県は生椎茸の生産量で全国4位。かつては季節的な作物でしたが、今では県の後押しもあって周年の作物になりました。雇用もその分生まれています。でも、生産することで廃菌床は増えてしまう。廃菌床が問題になることを知ったときに、自分自身の原体験を思い出したんです」。

畠山さんが小学生のころ、父はしいたけ栽培で使った菌床を畑に置いていた。そこから良く草が生えること、そして掘るとカブトムシの幼虫が多かったことを思い出した。「早速昆虫を飼育している現場を見学し、成虫だけで



カブトムシ、クワガタなどの昆虫から、
廃菌床を使用した飼育用の腐葉土なども販売している。



多肉植物の栽培に明るい従業員が始めた事業。
現在500種類5000株の多肉植物を扱っている。

①現在50種類ほどのカブトムシやクワガタなどを飼育している。
通信販売だけでなく来社しての購入にも対応。

②今年8月に開所した就労支援B型施設「Re:Walks」。農業、昆虫、
多肉植物など興味が持てる分野で業務にあたってもらう。



なく幼虫やその糞的巨大さに衝撃を受けました。そして日本のカブトムシを飼育する経験があればできそうだと思ったんです。実際に昆虫を仕入れ、飼育を始めました。1万2~3千頭の昆虫が、自分たちが1年間で排出する菌床を処理してくれることがわかりました。しかも糞と菌床の残渣は肥料になる。さらに今、その肥料を活用して多肉植物の栽培・販売も事業化しています」。

本質的な農福連携の先に 地域再生を見据える

畠山さんは今年8月に就労支援B型を開所した。「単純作業を任せられるという会社の利点だけでなく、幅のある自社の事業ならば、障がい者の方にとっても興味のある分野を選べる環境は魅力になる。利用者も従業員も生き生きと働ける場所にしたいですね」。

今後は就労支援で働く人たちが住む場所をこの地域に整備し、地域の人も集まれる交流の場、防災の拠点としての役割を持たせたいと語る畠山さん。学校と福祉の連携も見据えながら、小さな街のコミュニティを整備することで、持続可能な社会の実現を目指している。



立ち並ぶしいたけ栽培ハウス。徹底した温度湿度管理で栽培されたしいたけを全国へ販売している。